



建学の精神

The fundamental idea of a school is to educate in the various branches of useful knowledge and thus fit the pupils for the various duties and responsibilities of active life. The religious and spiritual influence brought to bear on the pupils is the most important thing in the school. Both of these ideas may and should be realized in a good school.

Sarah C. Smith, founder of Hokusei Gakuen

「本校の根本的な理想は、いろいろな分野で役立つ知識を教育し、生徒が実生活の様々な義務と責任を果たすことができるようにすることです。さらに、生徒に与える宗教的・霊的影響は、本校において最も重要なものです。この二つの理想は、良い学校をつくるために実現されなければなりません」

創立者 サラ・C・スミス



北星学園 校章・マーク
北星学園のシンボルマークは、学園の校名の由来となった“Shine like stars in a dark world”という言葉に象徴される「星」です。左から北星学園女子中学高等学校、北星学園大学・北星学園大学短期大学部、北星学園大学附属高等学校、北星学園余市高等学校の校章。

学校法人 北星学園

〒004-8631 北海道札幌市厚別区大谷地西2-3-1

TEL : 011-891-2731 FAX : 011-892-6097



創立

創立者サラ・C・スミスは、新栄女学校(現在の女子学院)に赴任しましたが、湿度の高い東京の気候で重い病に罹り、医師とアメリカ伝道協会から帰国を命じられました。しかし帰国はせず、転地療養のために札幌へ移り、1883年(明治16)幸いにも健康を回復、札幌に女学校を開校することを希望します。しかし、伝道協会が健康問題を抱えた上に開拓途上の地で活動する許可を下さなかったことから、外国人居留地のある函館に住み、宣教活動のかたわら、自宅で婦女子に英語、家事、聖書を教えながら機会を待ちました。

1886年(明治19)スミス36歳のとき、大島正健(クラーク博士の“Boys, be ambitious”を世に広めた札幌農学校第1期生、スミス女学校第3代校長)や佐藤昌介(札幌農学校第1期生、北海道帝国大学初代総長)らの働きかけにより、北海道尋常師範学校から英語教師の職を得ます。伝道協会からは女学校開学の資金援助は得られませんでした。スミスは師範学校からの給与を用いることで、その働きをスタートさせます。はじめは、北海道尋常師範学校教師用官舎に付属した旧厩舎を改造し、学び舎としました。

スミスは札幌で生徒が集まらないのではないかと懸念し、自宅で教えていた4人と教会関係3人の合わせて7人の少女たちと、新栄女学校2期生で教え子の麻生貞を伴って函館を出発しました。その中にはのちに恵泉女学園を創設する河井道もいました。7人の少女はみな10歳前後でしたが、その両親たちはいずれも熱心なキリスト教徒であり、スミスに対して強い信頼感を抱いて娘たちの札幌行きに同意しました。

草創期には資金もなく、スミスは師範学校の勤務もあって自分の学校に十分な時間を割くことができない事情もありましたが、生徒たち、とりわけ寄宿生にとっては、スミスと起居を共にした交わりの時間が、授業にもまして大きな学びを与えることになりました。

創立の背景と歴史

横浜のヘボン塾、東京一致神学校教授を経た後、明治学院の創立に参画した第一長老教会の牧師の息子ジョージ・ウィリアム・ノックスは、郷里のエルマイラに宛てて女性宣教師の派遣を依頼していました。この要請に応えたのが、北星学園創立者のサラ・C・スミスです。

スミスは、「実生活において義務と責任を全うできる有用な知識を教授する」ことを重視しました。これはスミスが学んだアカデミーの教育理念とも共通しています。

開学したばかりのころは私塾のようなものでしたが、スミスの教育はすぐに評判となり、1年を経ずして40名を超える生徒が集まったので、旧厩舎の教室は手狭となってしまいました。スミスの教育への情熱に打たれた北海道長官岩村通俊は、自分の娘を直ちに入学させたばかりか、北海道庁から新築校舎を無償貸与するよう取り計らっています。

1887年(明治20)8月25日、新校舎で初代校長スミス、生徒46名によるスミス女学校開校式が執り行なわれました。幸い多くの支援者が現われ、特に札幌農学校関係者は積極的にかかりました。道庁から貸与されていた校舎の期限が1894年(明治27)に切れ、移転を迫られたときには、新渡戸稲造が校地・校舎購入のために尽力しています。

スミス女学校は、この機に北星女学校に改称されました。新渡戸が、当時台頭しつつあった国粹主義的な時節への配慮から提案したといわれています。命名者は定かではありませんが、生徒たちが考えた中から「北星」(世にあって星のように輝く：フィリピの信徒への手紙2章15節)を新渡戸が奨め、スミスは喜んでこれを受け入れました。

購入することとなった校舎は既に老朽化していましたが、スミス女学校にとって初めての自前の校地と校舎が授けられたのです。校舎はその後、増改築を繰り返しながら1929年(昭和4)に新校舎が竣工するまでの長きにわたり、大切に使われました。

ちなみに今日、「札幌の木」となったライラックは、スミスが故郷エルマイラの自宅の庭から持ち帰ったもので、札幌農学校の付属植物園と北星学園の敷地に植えられ、札幌のあちこちに分けられていったものです。

北星学園は、サラ・C・スミスが創設し教育の基盤を築き、後継者アリス・M・モンクによる学校改革により発展をみしました。さらに、エリザベス・M・エバンスが戦後の新体制を牽引し、今日の北星学園が導かれました。

モンクが女子学院から当校に赴任してきたのは、33歳のときのことで、1915年(大正4)に校長に就任し、懸案となっていた北星女学校の文部省認可の取得、新校地の確保及び、寄宿舎、宣教師館、新校舎の建設に尽力しました。

エバンスは1911年(明治44)10月、25歳のときに北星女学校に教師として着任しました。先の不幸な戦争のため、宣教師たちは帰国を余儀なくされましたが、1947年(昭和22)エバンスは宣教師のいないミッションスクールになっていた北星学園に戻り、戦後の学校再建に寄与しました。女子短期大学開学に尽力して初代短期大学長となっています。エバンスの遺言によって、遺産の3分の1が北星学園に献金され、スミス・モンク・エバンス奨学金の基金となり、現在も学生・生徒のために用いられています。



創立者 William Calhoun Grainger (1843~1899年)
アメリカ・カリフォルニア州のパシフィック・ユニオン大学学長を辞して、日本伝道のために来日しました。

